

アーサー・ビナードの翻訳絵本 —『父さんがかえる日まで』論—

林 伸一

1. はじめに

モーリス・センダックの三部作と言われる『かいじゅうたちのいるところ』（1975年、神宮輝夫訳・富山房）『まよなかのだいどころ』（1982年、神宮輝夫訳・富山房）『父さんがかえる日まで』（2019）が日本語の翻訳で読めるようになっている。『父さんがかえる日まで』は、モーリス・センダックの英語の原題を『OUTSIDE OVER THERE』（1981年）といい、『まどのそとの そのまたむこう』という翻訳版が、脇明子訳で福音館書店から1983年に出されていた。翻訳者を変えて、2019年にアーサー・ビナード訳『父さんがかえる日まで』が偕成社から発行された。36年を経て、翻訳が刷新されたのであるが、40ページの絵本には「人が人とむきあわない今の時代に、センダックから届いた美しい手紙。あなたは、大切な人と見つめあって歩いていけますか?」との問題提起が書かれた帯が付けられている。

本稿では、モーリス・センダックの英語の原文と脇明子訳とアーサー・ビナード訳を対照させながら、絵本の翻訳の特徴と問題点を検討していきたい。

1-1. モーリス・センダック（Maurice Sendak, 1928年6月10日 - 2012年5月8日）

モーリス・センダックは、アメリカ合衆国の絵本作家である。『かいじゅうたちのいるところ』（Where the Wild Things Are）は、1963年出版。世界中で約2000万部売れている。その他80冊を超える作品を発表し、現代絵本界を代表する存在とされている。2009年『かいじゅうたちのいるところ』が映画化され、大きな話題を呼び、アニメーション映画や舞台美術にも取り組んだ。

モーリス・センダックは、次のような作品で受賞している。

1952年『あなはほるもの おっこちるところ』で、ニューヨーク・タイムズ年間最優秀図書に選ばれている。

1964年『かいじゅうたちのいるところ』でコールデコット賞を受賞。

1970年「国際アンデルセン賞画家賞」受賞。

1982年『OUTSIDE OVER THERE』で第33回全米図書賞（児童文学部門）を受賞している。（『ウィキペディア』参照）



1-2. 『まどのそとの そのまたむこう』（モーリス・センダック 作・絵 脇明子 訳、福音館書店）

1981年『OUTSIDE OVER THERE』が発行され、1982年に第33回全米図書賞を受賞し、翌年の1983年日本語の翻訳本が福音館書店より世界傑作絵本シリーズの一つとして出版された。

翻訳者の脇明子氏は、『OUTSIDE OVER THERE』との出会いを次のように回想している。

この絵本には、命がけの行きて還りし物語の匂いがする。

はじめて『まどのそとの そのまたむこう』を手に入れた時、私はロンドンで暮らしていた。（中略）

当時のハムステッドには、坂の途中に一軒の本屋があった。年季の入った木製の本棚に様々なジャンルの本がきちんと収まっている。いつ入っても気持ちの良い、静かな街の本屋だった。(中略)

店の正面左にはショーウィンドウがあり、新刊の絵本が展示されている。置き方にはいつも工夫がこらされており、店主の児童書への愛情が感じられた。その頃の私は子育ての最中で、どこへ行くにもベビーカーをカタカタ押して歩いていた。

ある日、ショーウィンドウに怪獣の人形が数匹いて、こちらを睨んでいた。だが私が立ち止ったのは、その見覚えのある“wild things”のせいではなかった。横に一冊の絵本が立て掛けてあったからだ。時代遅れの青い服を着てホルンを持った少女と、妙に目の大きな赤ん坊。二人の視線はどういうわけかまちまちだ。私はしげしげとその本を眺めると、暗示にかかったように店に入り、平積みの中から一冊抜いて、まっすぐレジへと向かった。『OUTSIDE OVER THERE』（『まどのそとの そのまたむこう』）by Maurice Sendak。1981年、初版本である。(以上、福音館書店の公式Webマガジン「ふくふく本棚」より、<https://www.fukuinkan.co.jp/blog/detail/?id=68>)

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』には、『まどのそとのそのまたむこう』が(神宮輝夫訳、富山房)となっているが、誤りであろう。(https://ja.wikipedia.org/wiki/モーリス・センダック)

脇 明子氏による翻訳本は、主なものだけでも、以下のように多数にのぼる。

モーリス・センダック『まどのそとのそのまたむこう』福音館書店、1983年
ジョージ・マクドナルド『お姫さまとゴブリンの物語』岩波少年文庫、1985年、新版2003年
マクドナルド『カーディとお姫さまの物語』岩波少年文庫 1986年、新版2003年
アリス&マーティン・プロヴェンセン『パパの大飛行』福音館書店、1986年
デ・ラ・メア『九つの銅貨』福音館書店、1987年
ル＝グウィン『辺境の惑星』ハヤカワ文庫、1989年
ルース・エルウィン・ハリス『丘の家のセーラ』（ヒルクレストの娘たち 1）岩波書店、1990年
モーリス・センダック『センダックの絵本論』島多代共訳 岩波書店、1990年
マクドナルド『金の鍵』岩波少年文庫、1996年、岩波書店、2020年。モーリス・センダック絵
ルイス・キャロル『鏡の国のアリス』岩波書店、1998年、同少年文庫 2000年
ルイス・キャロル『不思議の国のアリス』岩波書店、1998年、同少年文庫 2000年
ディケンズ『クリスマス・キャロル』岩波少年文庫、2001年
ラフカディオ・ハーン『雪女 夏の日の夢』岩波少年文庫、2003年
セシル・デイ・ルイス『オタバリの少年探偵たち』岩波少年文庫、2008年
フランシス・ホジソン・バーネット『小公子』岩波少年文庫、2011年
フランシス・ホジソン・バーネット『小公女』岩波少年文庫、2012年

脇 明子氏ご自身の著作物は、以下の通りである。

『かじ屋と妖精たち イギリスの昔話』岩波少年文庫、2020年（画・堀川理万子）
『幻想の論理 泉鏡花の世界』講談社現代新書、1974年／沖積舎（増補版）、1992年
『ファンタジーの秘密』沖積舎、1991年、新装版1993年・2004年
『読む力は生きる力』岩波書店、2005年
『魔法ファンタジーの世界』岩波新書、2006年

『物語が生きる力を育てる』岩波書店，2008年

『少女たちの19世紀 人魚姫からアリスまで』岩波書店，2013年

『読む力が未来を開く 小学生への読書支援』岩波書店，2014年

1-3. アーサー・ビナード訳『父さんがかえる日まで』(2019、偕成社)

モーリス・センダックの英語の原題『OUTSIDE OVER THERE』を脇 明子氏は、『まどのおとこの そのまたむこう』とほぼ原題に忠実にタイトル化し、本文もなるべく原文を尊重して、原文に沿って翻訳した。それに対して、アーサー・ビナード氏は、『父さんがかえる日まで』と原題から離れて意訳している。本文においても、その傾向が随所に見られる。



アーサー・ビナード訳『はじまりの日』の原題が『FOREVER YOUNG』（ポブ・ディラン作・直訳すれば「いつまでも若く」）であるように、原題と翻訳タイトルが異なることは、他にも例が数多くみられる。

ビナード氏は、次のような作品で受賞している。（林 2020a、林 2021a 参照）

2001年 詩集『釣り上げては』（思潮社）で中原中也賞受賞。（山口市と中原中也賞運営委員会より）

2005年 エッセイ『日本語ぽこりぽこり』（小学館）で講談社エッセイ賞受賞。

2007年 絵本『ここが家だ ベンシャーンの第五福竜丸』（集英社）で第12回日本絵本賞受賞。（注1）

2008年 詩集『左右の安全』（集英社）で山本健吉文学賞（詩部門）受賞。

2012年 ひろしま文化振興財団、第33回広島文化賞（個人の部）受賞。

2013年 絵本『さがしています』（童心社）で第44回講談社出版文化賞絵本賞、第60回産経児童出版文化賞、ニッポン放送賞受賞。

2017年 第6回早稲田大学坪内逍遙大賞奨励賞受賞。

2018年 絵本『ドームがたり』（玉川大学出版部）で第23回日本絵本賞受賞。（注2）

2020年 第32回 谷本清平和賞受賞。（公益財団法人「ヒロシマ・ピースセンター」より）

2. 三者比較

< S > OUTSIDE OVER THERE (5 音節)
< W > まどのおとこの そのまたむこう (13 拍)
< B > 父さんがかえる日まで (11 拍)

以下にモーリス・センダック (Maurice Sendak) の英語の原文を< S >、脇 明子氏の日本語翻訳を< W >、アーサー・ビナード氏の日本語訳を< B >で示す。タイトルの違いを示すと左のようになる。

2-1. 場面ごとの比較

次に、全体で13場面になる作品を、場面ごとに区切って比較し、検討を試みたい。

上のように場面ごとの枠内に英語では音節数を日本語訳にはモーラの拍数を（ ）内に示す。ただし、句読点などは拍数には含めない。あくまで文章表記上の長短を数値的に比較するためである。

(注1) (注2)公益社団法人全国学校図書館協議会は、絵本芸術の普及、絵本読書の振興、絵本出版の発展を願って、優れた絵本を顕彰する「日本絵本賞」を1995年より実施している。これは、1年間に日本で出版された絵本の中から、特に優れた絵本に「日本絵本賞大賞」、優れた絵本に「日本絵本賞」、翻訳絵本の優れた絵本に「日本絵本賞翻訳絵本賞」を授与するものである。（同賞ホームページより）

第1場面

< S > When Papa was away at sea, (8 音節)

< W > パパは うみへ おでかけ。(10 拍)

< B > 「いってらっしゃい……」父さんは 海を わたる ふなのりです。(24 拍)

絵本の最初の見開き2ページには、わずか一行の<When Papa was away at sea,>という従属文だけが示されているが、脇訳は原文に沿って「パパは うみへ おでかけ。」という自立文として訳出している。

それに対して、ビナード訳は「いってらっしゃい」という原文にはない見送りの挨拶言葉を加え、さらに「父さんは 海を わたる ふなのりです」というように父親の「ふなのり」という職業までも解説的に付け加えている。原文は、従属文であるが、脇訳が一つの自立した文、ビナード訳は二つの自立文となっている。英語は音節言語で、日本語はモーラ言語なので、単純には音の長さの比較はできないが、センダックの原文は、8音節であるのに対して、脇訳は10モーラ（拍）で、ビナード訳が倍の24拍となっている。



絵を主体とする絵本の場合、文字表記をできるだけ抑える傾向がある。絵本は、絵という非言語による視覚的な伝達手段を重視し、文字表記という言語的手段は補助的に用いられることが多い。

第1場面において、悪役のゴブリンがうしろ姿ではあるが二人描かれている。登場人物も、ゴブリンに気づいていないこともあり、文章上には表れていない。このように絵の中には、言葉では表しきれないほど多くの情報量が含まれている。

第2場面

< S > and Mama in the arbor, (7 音節)

< W > ママは おにわの あずまや。(11 拍)

< B > 母さんは じつと とおくを 見つめながら 父さんの かえりを まちます。(31 拍)

第2場面においても、原文は<and Mama in the arbor,> (7音節)と終止符が打たれずに、第3場面へと続いている。<arbor>「(木の枝・ツタなどをはわせた)あずまや、亭(ちん)」という語が使われているが、果たして英語圏の子どもに理解可能な「理解語彙」に入っているのだろうか。まず、「使用語彙」には入っていないであろう。<arbor (あずまや)>は、日本語や英語の「基礎語彙」「基本語彙」リストには、含まれていないであろう。ビナード訳は、<arbor (あずまや)>には触れずに、「母さんは じつと とおくを 見つめながら 父さんの かえりを まちます」と状況描写している。

第2場面においても、二人のゴブリンがうしろ姿ではないが、頭巾で顔がわからないように描かれている。実は、遠くを見つめている母親は、放心状態なのか育児放棄なのか、泣き出した赤ん坊に関心を示している様子がない。

第1場面でも、第2場面でも赤ん坊を抱きかかえているのは、主人公の少女アイダである。どちらも

裸足である。第1場面にはいなかった番犬(シェパード)が、第2場面の中央に描かれているが、番犬も近くにいるゴブリンたちには気づいていない様子で、その役割を果たしていない。

第3場面

<p>< S > Ida played her wonder horn to rock the baby still-but never watched. (17 音節)</p> <p>< W > アイダは あかちゃんのおもり。まほうのホルンをふいてあげよう。だけど、あかちゃんをみないでいたら、(40 拍)</p> <p>< B > いもうとはまだはいはいするあかんぼうなので、アイダが子守りをしなければなりません。ないてばかりいるあかんぼうでも、きれいなメロディーをきけばしずかになります。アイダはとくいのおずまきホルンをふいてあげました。ちょっとよそ見をしながら……(111 拍)</p>

第3場面において、原文は終止符が打たれることとなる。文章上は、第1場面で、父親のこと、第2場面で母親のこと、第3場面で、主人公のアイダのことが順に紹介されている。

原文の<wonder horn>の<wonder>は、「驚異、驚嘆、驚き」などの意味であるが、脇訳は、「まほうのホルン」としているのに対して、ビナード訳「とくいのおずまきホルン」とホルンの形状を示すにとどめている。「まほうのホルン」は、物語の後半において驚異の威力を発揮するのであるが、ビナード訳では、第3場面に「ないてばかりいるあかんぼうでも、きれいなメロディーをきけばしずかになります」という効用があることに限定している。

原文の<rock the baby>は、<rock a baby>が「前後や左右に揺らして子供をあやし寝かしつける」という意味から、脇訳では、「アイダはあかちゃんのおもり」、ビナード訳では、「いもうとはまだはいはいするあかんぼうなので、アイダが子守りをしなければなりません」と解説を含めて訳しているため、長くなっている。絵を見ても、赤ちゃんは木製の椅子のような揺りかごの中にいる。

脇訳は、3文に分けて訳している。第3文目は、「だけど、あかちゃんをみないでいたら、」と読点で文を止め、文を完結させずに、次の場面の思わぬ展開に関心と注目を集める形をとっている。

ビナード訳も、4文に分けて訳している。第4文目は、「ちょっとよそ見をしながら……」と言いさし文で、次の展開を推測させるような形をとっている。

第4場面

<p>< S > So the goblins came. They pushed their way in and pulled baby out, leaving another all made of ice. (24 音節)</p> <p>< W > ゴブリンたちが、やってきました。おへやにはいったゴブリンたちは、こおりのにんぎょうをかわりにおいて、あかちゃんをかかえてでていきました。(59 拍)</p> <p>< B > と、そのときです。だぶだぶふくのゴブリンがまどからしのびこんできて、あかんぼうをさらっていきました。かわりにおいたのは氷でできたそっくりさん。(68 拍)</p>

第4場面の原文は、2文であり、脇訳も2文で書かれている。ビナード訳は、3文となっており、その1文目は、「と、そのときです。」と物語に臨場感を持たせようとするような表現が加えられている。また、「だぶだぶふくのゴブリン」というように原文にはないゴブリンの服装も畳語で示している。

脇訳が「ゴブリンたちが、やってきました。」と原文に沿って書かれているのに対して、ビナード訳は、「ゴブリンがまどからしのびこんできて」と「まどから」を補い、「忍び込む」という「人に

気づかれぬようにして入り込む」意を含む動詞を用い、「あかんぼうをさらっていきました」と表現を補い、ゴブリンたちの嬰兒誘拐事件ともいべき犯罪性を訳出している。

日本人には、「ゴブリン」そのもののイメージが分かりにくいところを補うという効果があるとも言えるだろう。ゴブリン<goblin>は、ヨーロッパの民間伝承に登場する伝説の生物で、まれに「ガブリン」とも表記されることもある。ゴブリンは、主としてヨーロッパのファンタジー作品に登場する。

右のような絵が描かれたり、以下のように様々なイメージがあるようである。
(<https://ja.wikipedia.org/フランシスコ・ゴヤの画によるゴブリン<1799年>>)



- ① ゴブリンとは、邪悪な、または悪意をもった精霊である。
- ② ゴブリンとは、おふざけが好きで意地の悪い（だが邪悪とは限らない）妖精である。
- ③ ゴブリンとは、ぞっとするような醜い幽霊である。

『父さんがかえる日まで』では、①または②のイメージでゴブリンが描かれていると言えるだろう。

伝承や作品によってその描写は大きく異なるが、一般に醜く邪悪な小人として描かれることが多い。また、ドイツのコボルトは、上記のゴブリンのイメージに重なる事もあり、英文ではしばしば「ゴブリン」と訳される。
(<https://ja.wikipedia.org/ゴブリン参照>)

日本の民間伝承に登場する伝説の生物「鬼」とも類似点がありそうであるが、外見は異なるイメージがある。GA文庫のキャラクターカードに「ゴブリン」が登場する。その他に遊戯王の「鬼ゴブリン」のカードもある。



『ハリー・ポッターと賢者の石』(J.K. ローリング作/松岡佑子訳/静山社/1999)の映画に登場する「ゴブリン」は「小鬼」と訳され、外見は背が低く、長い鼻、細長い指を持っている。杖を必要としない独特の魔法の能力を持ち、有能な金属工とされ、その特徴は、ずるがしこく利口とされている。

第5場面

< S > Poor Ida, never knowing, hugged the changeling and she murmured: “How I love you.”
(19 音節)

< W > アイダは なにも知らずに にんぎょうを だきしめ、「だいすきよ」とささやきました。
(33 拍)

< B > 「いい子ね、かわいい子ね、ねんね、ねんね」アイダは 氷のそっくりさんを あやしました。
けれど、ぼたぼたとけていくだけ。(41 拍)

第5場面の<changeling>とは「取り替え子」のことであり、故意に、または、うっかりと取り替えられた子供のことを意味する。英語の「基礎語彙」「基本語彙」リストには、含まれていないであろう。脇訳では、「にんぎょう」と意識され、ピナード訳では、「氷のそっくりさん」と訳されている。

原文の“How I love you.”というアイダの発話は、脇訳では、「だいすきよ」と日本語的に訳され、ピナード訳では、「いい子ね、かわいい子ね、ねんね、ねんね」と日本的言語文化習慣を加味した表現が用いられている。ピナード訳では、「けれど、ぼたぼたとけていくだけ」という一文が添えられ

ているが、もともと原文では次の頁に描かれた状況を解説する形となっている。

日本の絵本には、「ぼたぼた」といった畳語になっているオノマトペが多用されているが、ビナード氏もそのようなオノマトペが日本人の子どもに好まれていることを熟知の上で用いている。

第6場面

< S > The ice thing only dripped and stared, and Ida mad knew goblins had been there.
(17 音節)

< W > ところが こおりは ぼたぼた とけだし、アイダは きがついて かんかんにおこりました。
(36 拍)

< B > 「なんてこと！いもうとじゃない！」アイダは すくと たちあがって いいました。
「きっと これは ゴブリンたちの しわざだわ！」(49 拍)

第6場面の原文に<mad>という語が出てくるが、英国とアメリカでは異なる意味で使われる。

英国人はよく「頭がおかしい」の意味で<mad>を使うが、アメリカ人は<mad>よりも<crazy>を多く使う。元々<mad>は「精神疾患」を表す単語であったが、現在の英語で「精神疾患」の人に対して<mad>は使わない。日本語の「頭がおかしい」は<mad>や<crazy>より深刻な状態を表す場合もあると思われるが、<mad>というスラングではそうではない。アメリカ人は普段<mad>を<angry>と同じ意味で使う。(https://www.eigowithluke.com/mad/参照)

ここでも、脇訳では、「かんかんにおこりました」としている。ビナード訳では、「なんてこと！いもうとじゃない！」と発話として訳出している。原文の<goblins had been there>もアイダの発話文「きっと これは ゴブリンたちの しわざだわ！」に変換して表現している。「しわざ」は、多くの人にとがめられるような行為を示している。この場面では、解説文よりも、二つの発話文を用いて表現したほうが、臨場感溢れる物語として読者に伝わりとの翻訳者としての判断があったと思われる。

第5場面のビナード訳の「けれど、ぼたぼたとけていだけ」に対応する部分は、原文が<The ice thing only dripped>で、脇訳では、「ところが こおりは ぼたぼた とけだし、」となっている。

畳語の「かんかん」は「怒る」と共起する副詞で、「とても強く怒っている」様子を表わす擬態語である。畳語の「ぼたぼた」は、「しずくが次々に落ちる音」を表す副詞で、擬音語（音象徴語）である。「かんかん」や「ぼたぼた」といったオノマトペを用いたほうが、日本人の読者には、物語に臨場感とより具体的なイメージを付け加える効果が得られるであろう。

第7場面

< S > “They stole my sister away!” she cried, “To be a nasty goblin’s bride!” Now Ida in a hurry (23 音節)

< W > 「ゴブリンたちが ぬすんだんだわ！ およめさんにしようと おもってるのね！」さあ、いそがなくてはなりません。(45 拍)

< B > 「わたしの いもうとを さらって どうする気なんだろう？ ゴブリンの およめさんに する つもりかも・・・ぜったい いやだ！」(48 拍)

原文の<stole>は、確かに脇訳の「ぬすんだんだ」ではあるが、物ではなく「いもうと」という人なのだから、ビナード訳の「さらって」がふさわしいであろう。



第7場面の原文は、<Now Ida in a hurry>と言いさし文で止められていて、文は見開きの次頁へと続いている。それに対して、脇訳では、「さあ、いそがなくてはなりません。」と文を完結させている。ビナード訳では、<Now Ida in a hurry>の部分は、特に訳出されておらず、「わたしの いもうとを さらって どうする 気なんだろう？」と自問し、「ゴブリンの およめさんにするつもりかも・・・」と自答している。アイダの叫びとして「ぜったい いやだ！」という発話を付け加えている。それは、アイダが両手の握りこぶしを振り上げている上の絵を言語化しているとも言える。非言語の絵を「ぜったい いやだ！」と言語化して示しているわけで、翻訳者としての役割を逸脱していると批判する人もいるかもしれない。しかし、文章の翻訳者というだけでなく、絵の解釈を含めての伝達者としての役割をビナード氏が引き受けているとも考えられる。

原文が発話部分と地の文とで構成されているのに対して、ビナード訳では、生き生きとした発話文だけで構成されている。絵本に限らず、紙芝居であっても、発話部分が生き生きしているか否かが、見る側の興味・関心を引き寄せるカギとなっている。

ちなみに浜田佳子は『へいわってどんなこと?』と問いかける絵本の中で「いやなことは いやだって、ひとりでも いけんが いえる」ことを小さな女の子の絵とともに提示している。

第8場面

< S > snatched her Mama's yellow rain cloak, tucked her horn safe in a pocket, and made a serious mistake. (23 音節)
 < W > アイダは ママの きいろいレインコートに くるまり、ホルンをおちないように ポケットにつっこみました。ところが そのあとが しっばいでした。(61 拍)
 < B > 母さんの きいろい レインコートを きて、アイダは ホルンを ポケットに いれました。
 「いもうとを とりかえさなきゃ」ところが、また ちょっと うっかりして・・・(63 拍)

原文も脇訳も地の文だけであるが、ビナード訳では、「いもうとを とりかえさなきゃ」という発話が挿入されている。アイダの実際の発話というよりは、アイダの決意表明のような内言語なのかもしれないが、引用を示すカギ括弧の中に入れられている。

原文の<and made a serious mistake>の部分を脇訳では「ところが そのあとが しっばいでした」としているのに対して、ビナード訳では、「ところが、また ちょっと うっかりして・・・」と言いさし文で、次頁に続いている。原文の<a serious mistake>をビナード訳では「重大な過失」というよりは<careless mistake>「不注意な誤り」「うっかりミス」くらいの扱いにしている。

第9場面

< S > She climbed backwards out her window into outside over there. (15 音節)
 < W > アイダは うしろむきになって まどわくをこえ、まどのそとの そのまたむこうへでていったのです。(42 拍)
 < B > アイダは まどから そとへでるとき、うしろむきに でしたのです。ちゃんと まえを むいて でないと、だれでも・・・ふわふわの うわのそらを さまようことになってしまいます。(70 拍)

第9場面の原文の末尾の部分<outside over there>が、センダックの原本のタイトルになっている。脇訳の「まどのそとの そのまたむこう」が、その部分に該当し、翻訳本のタイトルにもなっている。ビナード訳では、「ちゃんと まえを むいて でないと、だれでも・・・ふわふわの うわのそらをさまようことになっちゃうのです」と解説的な一文が加えられている。何かいいことやうれしいことがあって、心が落ち着かない様子を表わす「ふわふわ」というオノマトペと「うわのそら」の組み合わせが面白いが、それが「まどのそとの そのまたむこう」に該当していると考えられる。原本の表題が<outside over there>であることは、原本のキーワードであるとも言えるであろう。ビナード訳のタイトルも「ふわふわの うわのそら」としてもよさそうなものだが、子供たちには「うわのそら」という抽象概念がとらえにくいであろう。

この第9場面にもゴブリンが三人、赤ちゃんをさらっていく様子が描かれている。うしろ向きに出たアイダには、ゴブリンたちが見えていない。川には第1場面でゴブリンたちが用意していたヨットのような小船が橋のたもとにつながれており、用意周到に誘拐が企てられていたのである。

もともと英語の原本の裏表紙には、<kidnap her baby sister>と誘拐が明示されている。

第10場面

<p>< S > Foolish Ida never looking, whirling by the robber caves, heard at last from off the sea her Sailor Papa's song: (28 音節)</p> <p>< W > アイダは なにもみないで ふわふわとんで、どろぼうたちのどうくつのそばを とおりすぎてしまいました。けれど そのうち とおいうみから、ふなのりのパパのうたが きこえてきました。(78 拍)</p> <p>< B > ふわふわふわの うわのそらでは なにもかも わからなくなります。アイダは かぜに ふかれて くもと いっしょに ながれていきます。あのゴブリンたちの かくれがの うえを とんでいても 気がつきません。でも、とおい 海の むこうから 父さんの こえが きこえてきました。父さんが うたってくれているのです！(126 拍)</p>

第10場面では、原文に<whirl>「〈ものを〉ぐるぐる[くるくる]回す、回る、〈頭が〉くらくらする、めまいがする」という動詞が出てくるため、脇訳でも「ふわふわとんで」と豊語のオノマトペが用いられている。ビナード訳でも「ふわふわふわの うわのそら」と「ふわ」を三回繰り返す豊語となっている。

原文と脇訳では、<Sailor Papa>「ふなのりのパパ」と第10場面になって初めてアイダの父親が船乗りであることがわかる。ビナード訳では、第1場面ですでに「父さんは 海を わたる ふなのりです」と紹介済みである。

脇訳では、「とおいうみから、ふなのりのパパのうたが きこえてきました」と原文に沿った訳が付けられているのに対して、ビナード訳では、「父さんが うたってくれているのです！」と恩恵を表わす授受表現が付け加えられている。絵本上の行数で比較しても、原文は4行(28音節)、脇訳も4行(78拍)であるのに対して、ビナード訳は、9行(126拍)で行数では倍以上になっている。

第11場面

< S > “If Ida backwards in the rain would only turn around again and catch those goblins with a tune she’d spoil their kidnap Honeymoon!” (31 音節)
 < W > 「うしろむきでは なんにもならぬ くるり まわって ホルンをおふき あかんぼさらいの ゴブリンたちの けっこんしきが はじまるよ！」(55 拍)
 < B > 「アイダよ うわのそらの アイダよ よそ見しないで くるりと むきをかえれば ゴブリンたちがみつかるよ！とくいの ホルンを やつらに ふいてごらん」(62 拍)

第11場面では、原文の<tune>は「旋律、調べ、節、メロディー」という意味であるが、脇訳では「ホルンをおふき」、ビナード訳では「とくいの ホルンを やつらに ふいてごらん」と具体的に訳出している。この第11場面でやっと原文に<kidnap>（誘拐）という語が現われ、原文の<their kidnap Honeymoon>は、脇訳では「あかんぼさらいの ゴブリンたちの けっこんしき」と訳されている。それが、ビナード訳では、特に訳出されていない。それは、すでに第7場面で「わたしの いもうとを さらって」と誘拐事件であることが明示されているからであろう。

第12場面

< S > So Ida tumbled right side round and found herself smack in the middle of a wedding. Oh, how those goblins hollered and kicked, just babies like her sister! (35 音節)
 < W > そこで アイダは くるりとまわり、たちまち けっこんしきの まっただなかに とびこみました。ところが、ゴブリンたちときたら いもうとみたいな あかちゃんばかりで、あしをばたばたさせては はなを ぶうぶう ならしていました！(97 拍)
 < B > 父さんの いったとおり、アイダは くるりと むきを かえて おみごと！ゴブリンの かくれがに もぐりこみました。あかんぼうに ばけた ゴブリンたちは、ぜんいん いもうとに そっくり！ぎゃあぎゃあ なきながら、せいだいに けっこんパーティーを ひらいています。(106 拍)

原文の<holler>には、「叫ぶ、大声で言う、わめく、不平を言う、ぶつぶつ言う」などの意味があるが、脇訳では「はなを ぶうぶう ならしていました」となり、ビナード訳では「ぎゃあぎゃあ なきながら」と別々の畳語のオノマトペを使っており、受ける印象も異なる。日本語の文脈では、赤ん坊が「はなを ぶうぶう ならして」という表現はあまり用いられないと思われる。第12場面の絵を見ても、ビナード訳の「ぎゃあぎゃあ なきながら」の方がふさわしいように思われる。

第13場面

< S > “What a hubbub,” said Ida sly, and she charmed them with a captivating tune. The goblins, all against their will, danced slowly first, then faster until they couldn’t breathe. (38 音節)
 < W > 「なんて うるさいんでしょう」と、アイダは いってやりました。そして、すぐに うっとりするような おんがくを はじめました。ゴブリンたちは、じぶんでも しらないうちに おどりだしてしまい、どんどんはやくなるおどりに たちまち いきがつけなくなってきました。(109 拍)

< B > 「おやまあ にぎやかね」アイダは おねえさんらしく いいました。「それじゃあ、わたしが
すてきな メロディーを きかせてあげましょう」ホルンを ふくと、みんな ならんで おど
りはじめました。ゴブリンって そうしないでは いられないのです。(96 拍)

原文の<hubbub>は、「がやがや(いう音)、どよめき、大騒ぎ」を意味する。<What a hubbub>と
いうアイダの発話を脇訳では「なんて うるさいんでしょう」とマイナス・イメージで表現し、ビナ
ード訳では、「おやまあ にぎやかね」と、どちらかというプラス・イメージで表現している。

<hubbub>の発音は/hábAb(米国英語)/であり、乳児が発する意味のない声「喃語(なんご)
Babbling」に相当するのではないかと考えられる。喃語期の乳児は、言語を獲得する前段階で、声帯
の使い方や発声される音を学習していると考えられている。最初に「あっあっ」「えっえっ」「あうー」
「おおー」など、母音の使用が始まり、その後多音節からなる音(「ばぶばぶ」など)を発声するよう
になる。

<hubbub>の発音が、「ばぶばぶ」などの喃語と近似しているように思われる。喃語(baby
babble)の使用によって乳児は口蓋や声帯、横隔膜の使い方を学び、より精密な発声の仕方を覚えて
いくと言われている。<babble>とは、乳児に限らず、「(理解できないくらい)早口でぺらぺらしゃ
べる、くだらないおしゃべりをする、ぺちゃくちゃしゃべること」を意味することもある。

原文の<captivating>は、「魅惑的な、人の心をとらえるような」という意味であるが、脇訳では
「うっとりするような」と訳され、ビナード訳では、「すてきな」と訳されている。

第14場面

< S > “Terrible Ida,” the goblins said, “we’re dancing sick and must to bed.” But Ida
played a frenzied jig, a hornpipe that makes sailors wild beneath the ocean moon.
(39 音節)

< W > 「ひどいよ アイダ」とゴブリンたちは いいました。「こんなに おどっちゃ めがまわる」
けれど アイダは へいきで どんどん ちょうしを はやめていきました。さあ、こんどは
ふなのりが つきよにおどる いさましい ホーンパイプおどりです。(95 拍)

< B > アイダは おもいきり もっと にぎやかに ホルンを ふきました。ゴブリンたちも もっと
もっと はげしく おどるしか ありません。「やめてくれ! もう いきが できないよ!
ひっくりかえっちゃう」でも アイダは やめません! (89 拍)

原文のホーンパイプ<hornpipe>とは、17世紀後半に生まれたイギリスのフォークダンス、および
そのための舞曲のことで、いくつかの種類があり、クラシック音楽にも取り入れられた。また、動物
の角を組み込んだ木管楽器を意味することもある。脇訳の「ふなのりが つきよにおどる いさましい
ホーンパイプおどりです」という表現からは、もっとも知られている曲と言われる『水夫のホーンパ
イプ(The Sailor’s Hornpipe)』のことを指しているのかもしれない。(フリー百科事典『ウィキペ
ディア(Wikipedia)』ホーンパイプ参照)

ビナード訳では、「おもいきり もっと にぎやかに ホルンを ふきました」という訳にとどめて
おり、直接ホーンパイプ<hornpipe>には、触れていない。

前項の第13場面からビナード訳の拍数が、脇訳よりも少なくなっている。

第15場面

< S > Those goblins pranced so fierce, so fast, they quick churned into a dancing stream.
(18 音節)

< W > ゴブリンたちは ぐるぐるまわって おどりながら、とうとう みんな かわにはいり、うずまくみずといっしょになって すぐに みえなくなりました。(64 拍)

< B > あまりに はげしく おどりつづけたので ゴブリンたちは あしがとけて、おなかも とけて 川に なって ながれていきました。(51 拍)

原文の<prance>とは、「〈人が〉意気揚々と進む；踊りはねて歩く」ことでダンスの用語にもなっているようである。<fierce>は形容詞で「激しい」の意である。脇訳では「ぐるぐるまわって おどりながら」となり、ビナード訳では「あまりに はげしく おどりつづけたので」となっている。

原文の<churn>は、「かき混ぜる」「激しく動く」の意である。原文の後件<they quick churned into a dancing stream>は、脇訳では「とうとう みんな かわにはいり、うずまくみずといっしょになって すぐに みえなくなりました」とゴブリンたちが、川に入っていくという解釈をしている。しかし、ビナード訳では「ゴブリンたちは あしがとけて、おなかも とけて 川に なって ながれていきました」と異なる解釈をしている。原文がわずか18音節の短い文章なので、解釈が分かれるとしても致し方ないであろう。第15場面の絵は、どちらにも解釈できる絵となっている。

いずれにしても、第3場面で「まほうの ホルン」(脇訳)として紹介されたホルンが、文字通り魔法と言ってもいいような威力を発揮したわけで、ビナード訳の「あしがとけて、おなかも とけて 川に なって ながれていきました」の方が、その凄まじさが強く大きく感じられるであろう。

第16場面

< S > Except for one who lay cozy in an eggshell, crooning and clapping as a baby should. And that was Ida's sister. (28 音節)

< W > でも ひとりだけ たまごのからに すっぽりおさまり、ふんふんうたったり てをたたいたりしている あかちゃんがいました。そして、それこそ アイダのいもうとに ちがいありませんでした。(78 拍)

< B > ただ ひとりだけ とけないで、にこにこしている あかんぼうが いました。そうです、アイダのほんとうの いもうとです。(49 拍)

原文の<lay cozy>は「居心地よく横たわる」といったような意味で、脇訳は「すっぽりおさまり」で、ビナード訳では「にこにこしている」となっている。ひとつ前の第15場面で、ビナード訳で「ゴブリンたちは あしがとけて、おなかも とけて 川に なって ながれていきました」としたために、第16場面では「ただ ひとりだけ とけないで」という説明的な付帯条件がついている。

原文の<croon> は「小声で感傷的に歌う、低い声で口ずさむ」であり、現在分詞形の<crooning and clapping>が、脇訳では「ふんふんうたったり てをたたいたりしている」となっているが、ビナード訳では特に訳出されていない。

第16場面の最後の1文は、原文が<And that was Ida's sister.>と過去形になっており、脇訳でも「そして、それこそ アイダのいもうとに ちがいありませんでした」と文末を過去形にしている。それに対して、「そうです、アイダのほんとうの いもうとです」とビナード訳では、非過去のきっぱ

り言い切る断定文となっている。「物語の現在」という物語の生起と同時に、現在時制を用いて叙述する方法がある。原文が過去形であっても、訳文を現在形にすることによって、物語の生起する現場にいるように描き、臨場感を出すことができる。

第17場面

< S > Now Ida glad hugged baby tight and she followed the stream that curled like a path along the broad meadow. (26 音節)
< W > アイダは おおよろこびで あかちゃんを だきしめ、こみちのように うねうねとながれる おがわにそって、のはらを あるいてかえりました。(57 拍)
< B > アイダは いもうとを しっかり だきあげて、いえへ かえります。ほんとうの 川の ながれにそって、いもうとと 見つめあいながら。(54 拍)

原文の<the stream that curled like a path>を脇訳でも「こみちのように うねうねとながれる おがわ」としている。それに対して、ビナード訳では、「ほんとうの 川の ながれ」としている。それは、第15場面で、ビナード訳で「ゴブリンたちは あしがとけて、おなかも とけて 川に なって ながれていきました」としたために、「ゴブリンたちの足やお腹がとけてできた川」と「ほんとうの 川」の流れを区別しなければならないと考えたのであろう。

ビナード訳に「こみちのように うねうねとながれる」の修飾部分が抜け落ちたのであるが、その一方「いもうとと 見つめあいながら」が加えられている。それは、第3場面で「ちょっとよそ見をしながら…」うずまきホルンをふいていたアイダの反省の念が込められているからであろう。

また、「人が人とむきあわない今の時代に、センダックから届いた美しい手紙。あなたは、大切な人と見つめあって歩いていけますか?」との問題提起の帯に応えようとしているかのようである。

第18場面

< S > and up the ringed-round hill to her Mama in the arbor with a letter from Papa, saying: (23 音節)
< W > そして とうとう、こんもりまるい おかのうえまで もどってみると、ママは あずまやにいて、そこには パパのてがみが きていました。(55 拍)
< B > おかを ぐるりと まわって、森を ぬけると、やっと 母さんに あえました。海を わたつて とどいた 手紙を 母さんは もっています。そこには 父さんの 字で こう かいてあったのです。(77 拍)

原文と脇訳は、第17場面から続く一文である。それに対して、ビナード訳は、三文に分けて書かれている。その三文目は、「そこには 父さんの 字で こう かいてあったのです」と原文の<saying:>を解説するような文となっている。原文と脇訳にはない「海を わたつて とどいた 手紙」という表現もビナード訳には、加わっている。そうするとこの物語の第1場面から第18場面までのストーリー展開は、何日間の出来事だったのだろうと考えさせられる。1日か2日の出来事ではなさそうで、「ふわふわのうわのそらをさまよう」時間が、思った以上に長かったのであろうか。脇氏も「命がけの行きて還りし物語の匂いがする」と述べているのも、そのような紆余曲折を感じとってのことであろう。

それにしても、第18場面と第2場面は、ほぼ同じ構図で、番犬と母親の位置もほぼ同じである。母

親は、自分の赤ちゃんが誘拐されたにも拘わらず、取り乱した様子もなく、あずまやにすわったままである。不思議なのは、地面に落ちた母親と赤ちゃんの帽子の位置までもほぼ同じである。父親の不在中に奮闘して、妹を奪還したアイダとは、対照的に、母親の動きのなさが気になるところである。

第19場面

< S > “I’ll be home one day, and my brave, bright little Ida must watch the baby and her Mama for her Papa, who loves her always.” (30 音節)
 < W > 「パパは そのうち かえりますが、それまでは パパの いさましい ちいさなアイダが、いつもアイダのことを おもっている パパのために、あかちゃんと ママとを みていて くれる こととおもいます。(80 拍)
 < B > 「毎日 なみに ゆられています。そっちは みんな げんきかい？アイダよ、あかんぼうの せわをして、母さんの ことも だいじにね。しっかりたのんだよ、父さんが かえる 日まで」 (74 拍)

原文の<I’ll be home one day>が脇訳では「パパは そのうち かえります」となり、いずれにしろ帰る日は明示されていない。ビナード訳では、「毎日 なみに ゆられています。そっちは みんな げんきかい？」という原文にはない手紙の表現が挿入されている。最後の一文「しっかりたのんだよ、父さんが かえる 日まで」も原文にはない表現で、しかも「父さんが かえる 日まで」がビナード訳のタイトルとなっている。

第20場面

< S > Which is just what Ida did. (7 音節)
 < W > アイダは ちゃんと そのとおり やったのでした。(19 拍)
 < B > もちろん アイダは しっかり やっています。(18 拍)



原文の末尾が<Ida did.>と過去形になっているためか、脇訳が「アイダは ちゃんと そのとおり やったのでした」と過去形になっている。それに対して、ビナード訳は、「もちろん アイダは しっかり やっています」と非過去形となっている。これは、第16場面と同じように「物語の現在」という物語の生起と同時に、現在時制を用いて叙述する方法を用いていると見ていいであろう。その方が、アイダの頼もしい様子を読者に強く印象づける効果がある。

たとえ原文が過去形であっても、訳文を現在形にすることによって、物語の生起する現場にいるように描き、文としての断定性を強め、臨場感を出すことができる。さらに言えば、「アイダは、父さんの言われたとおりにやった」というだけでなく、「たとえ父さんに言われなくても、アイダは、しっかり自分の判断でやっています」というニュアンスまでも訳文に含ませているのではないかと思われる。

2-2. 三者比較のまとめ（場面ごとの音節数と拍数）

場	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
S	8	7	17	24	19	17	23	23	15	28	31	35	38	39	18	28	26	23	30	7
W	10	11	40	59	33	36	45	61	42	78	55	97	109	95	64	78	57	55	80	19
B	24	31	111	68	41	49	48	63	70	126	62	106	96	89	51	49	54	77	74	18

三者比較のまとめとして、場面ごとの音節数と拍数を表にすると前頁のようになる。原文の音節数は40を超えておらず、文章表現が抑制的であることがわかる。脇訳で、拍数が一番多かったのが、第13場面で109拍となっている。脇としては、第13場面をこの物語の山場と考えてのことかもしれない。

ビナード訳で、拍数が一番多かったのが、第10場面で126拍となっており、この物語の山場ととらえているのかもしれない。全場面のトータルでは、原文が456音節、脇訳が1124拍、ビナード訳が1307拍であった。ビナード訳が、解説的で直接話法を多く用いているため長くなっていると思われる。

3. センダックの絵本論

3-1. 『OUTSIDE OVER THERE』は恐怖について書かれた本

モーリス・センダックの『センダックの絵本論』の「ざっくばらんな話」には、『OUTSIDE OVER THERE』（『まどのそとのそのまたむこう』）について、次のように書かれている。

『まどのそとのそのまたむこう』は、私の独自性が最もよく現れている作品で、自分ではとても気に入っています。あの本のほとんどは、子どものときに私を脅えさせたものをもとに作られています。

つまり、同書の中の赤ちゃんが作者モーリス・センダックの視点であり、同書が恐怖について書かれた本ということになる。

「両親がどちらも仕事に追われていて時間がなかったために、私は否応なしに彼女（姉）に押しつけられてしまったのでした」と同書のアイダに当たる姉との関係について述べている。

「赤ん坊の世話をしなくてはならない姉さんのアイダは、新しくやってきたその子を、愛し、かつ憎んでいるのです」と述べている。アイダが赤ん坊を憎んでいるというのは、シブリング・ライバルリイ (sibling rivalry) の状態で、姉妹が互いに親の愛をめぐる争う心理状態にあることを意味する。

「私はそのころひどく病気がちな子どもで、そのことをとても不安に思っていました。それは主に、両親が軽率にも私が病気なのを嘆き悲しみ、この子はどれくらい生きられるだろうかとばかり言い続けていたからでした。そのおかげで、私は生き続けるということは、ずいぶんあぶなっかしい仕事なのだということを、早くから知っていました」とセンダックは、子どもの頃の状況を述懐している。

さらに当時（1932年3月1日）、リンドバーグ誘拐事件という赤ん坊が連れ去られる事件が起こり、それが大きなニュースになり、センダックにも精神的な外傷を与えた体験であったようだ。

社会情勢が不安定だった当時、米国の飛行家チャールズ・A・リンドバーグの生後20カ月になる赤ちゃんが何者かに誘拐・殺害された事件は全米中を震撼させた。

「私は、そのまっただ中において、四歳で、病気で寝ており、自分とその赤ん坊をごっちゃにしていました。私は、もしその子が帰ってきたら自分も大丈夫だという迷信のようなものにとらわれていました」。センダックが、誘拐された赤ちゃんと自分を同一視していたことがわかる。

現実のリンドバーグ誘拐事件では、悲しいことに赤ん坊はもどってこなかった。

『まどのそとのそのまたむこう』は、私をリンドバーグ事件から解放してくれました。あの本の中で、私はリンドバーグの赤ん坊であり、姉が私を助けにきてくれた」とセンダックは自著と自身との関係について語っている。「迷信のようなもの」が絵本に宗教画を見るような印象を与えるのであろう。

ブラウンあすか氏は「センダックは、その恐怖の日々から受けた外傷・内面心理を本作品に投影させたと言えるだろう。センダック作品が小さな読者を魅了する理由は、恐怖も真実であるという普遍性にあるからであろう。怖いものを隠して虚偽を行うよりも、怖いものも存在することを示す方が子供には伝わる」と語っている。(https://www.ehonnavi.net/ehon/704/まどのそとのそのまたむこう

参照) 子供の側にも「怖いもの見たさ」の心理が働き、怖いものに好奇心を持つことがある。

モーリス・センダックは2012年アメリカのコネティカット州で亡くなった。両親に「この子はどれくらい生きられるだろうか」とばかり言い続けられたモーリスは、享年85歳だった。

3-2. アイダと母親との和解

また、センダックは、「そこにはアイダと母親との和解もあります」と述べている点が注目に値する。

「アイダの母親は怪物ではありません。彼女は子どもに無関心なわけではないのです。彼女はたまたま夫の不在をさびしく思い、ほんの一瞬赤ん坊をほったらかしにしていただけなのです」とセンダックは、母親の置かれた状況を擁護し、母親の立場を弁護している。

母親が、赤ん坊をほったらかしにしていたために、ゴブリンにさらわれたことにも気づかず、自分で探そうともしないとアイダは母親を非難したかもしれない。しかし、無事赤ちゃんを救出して帰還すると、父親からの手紙が届いていた。その手紙の存在が、アイダと母親との和解につながったのだろう。現代においても、改めて子育てのための父親の役割の重要性を考えさせられる。

「アイダの場合を言うならば、彼女はすばやい決断を迫られていました。赤ん坊に縛りつけられているのが嫌だった」とアイダの視点にもセンダックは言及している。アイダは、赤ん坊の誘拐事件に気づき、怒りをあらわにし、赤ん坊を連れ戻す空想（ファンタジー）の世界へと一人で旅立つことになる。ファンタジーの世界と現実の世界に流れる時間感覚の差異を読者は感じるであろう。

「結局アイダは何もかもを本来あるべき秩序にもどします。なぜなら、健康な子どもである彼女としては、そうしないわけにはいかないし、またそうしたいと思うからです。彼女は赤ん坊を愛しています。憎むのはほんの時どきのことにすぎないのです」とシプリング・ライバルリィを上手に処理し、協調・公平・正義の感覚を育ててゆく少女へと成長していくことが期待される結末になっている。

4. 『父さんがかえる日まで』の中のゴブリンの現代的意味

『まどそのとの そのまたむこう』の翻訳者である脇明子氏は次のように述べている。

「物書きには、吐かねばならない時がある。この絵本を繰ると、センダックが本当は子どものために描いてなどいないことがすぐにわかる。センダックは誰のためにも描いていない。センダックは吐いてしまったのだ。魂の奥に沈殿していた、なにがしかの記憶を。そのような絵本が良いか悪いかということは、私にはわからない。ただ言えることは、センダックがそれをしなければ、この絵本はこの世に存在しなかったということだ。そういう作品を子どもと一緒に分かち合うことに、なんの異論があるだろう」。(以上、福音館書店の公式Webマガジン「ふくふく本棚」より)

「魂の奥に沈殿していた、なにがしかの記憶」とは、前項の lindenberg 誘拐事件のことである。

脇氏に応答するかのようにセンダックは、次のように語っている。

「私は子どもたちのことをおおいに気にかけています。子どもたちのためにかくわけではないと言ったりもしますが、だからといって子どもたちのことを気にかけていないわけではないのです。私は自分の好きな音楽や絵のすべてに、子ども時代への強いノスタルジアを、子どもたちとの熱狂的な連帯感を投影しています」(『センダックの絵本論』p. 230より)

脇氏は、絵本の読者について、次のように述べている。

「本というものは読者を持つ。絵本の読者は子どもである。その子どもは小さく、守られるべき存在だが、子どもを読者にお話を書く一人として、ゆめゆめ忘れてはならないと思っていることが私にはある。(中略)『かいじゅうたちのいるところ』のマックスは、抑圧に対する怒りを爆発させた。『ま

どのそとの『そのまたむこう』のアイダは“不在”の暴力に立ち向かった。静かで、破壊的で、氷のように冷たく、時に命さえ奪いかねないその暴力に、子どものアイダは果敢に戦いを挑み、押し戻し、そして生還したのだ。これは、命がけの行きて還りし物語だと、私は思う。(「ふくふく本棚」より)

新訳された『父さんがかえる日まで』の現代的な意味を考える時、ゴブリンは何を意味するのかという問題が残る。米国の「グーグル、アマゾン、フェイスブック、アップル」の4社のことをGAFA(ガーファ)というが、ピナード氏は、ガーファのような巨大企業がゴブリンではないかと言っている。

筆者は、あえて新型コロナ・ウイルスがゴブリンではないかと思う。センダックにとっては、リンダバーグ誘拐事件で赤ん坊を連れ去ったのがゴブリンであっただろうが、現代では目に見えない新型ウイルスが人間の命を危険にさらすゴブリンで、そこここに存在し、気づかないうちに感染している。世界的にも恐れられている。アイダのホルンがワクチンや治療薬に相当するだろう。ゴブリンも水に溶けて流れてしまう点では、コロナ対策で手洗いすれば、ウイルスが流れてしまうのと似ている。

5. 読者対象と今後の課題

前項で「絵本の読者は子どもである」との一般論が断定的に述べられたが、果たして単一の肯定論ばかりではないだろう。ここでは、「絵本の読者は大人でもある」と提起したい。

『父さんがかえる日まで』の中でも母親が、ほんの一瞬赤ん坊をほったらかしにただけで赤ん坊が誘拐され、死に至ることも考えられる危機に陥った。育児放棄やネグレクトが社会問題となっている中で、子どもにこの絵本を読み聞かせている母親が、これは、もしかすると自分のことではないかとふと考えることもあるだろう。育児ノイローゼになっている母親が、『父さんがかえる日まで』を手にするかもしれない。

そうだとしたら、本当に期待される読者は、子どもというよりは、母親ということになる。

また、本書に一切姿を現さない父親は、母親とアイダに育児と家事を任せて航海に出て、いつ帰るかもわからない船乗りの仕事をしている。男は外で仕事、女は内で家事と育児という性的役割分業の固定化を絵に描いたような絵本となっている。そのような場合、本当の読者としては父親が期待されているのかもしれない。

センダックも「両親がどちらも仕事に追われていて時間がなかったために、私は否応なしに彼女(姉)に押しつけられてしまった」と述懐しているように、親が不在の家庭での子育ての問題がある。

また、本書では、アイダが最初から最後まで裸足で登場する。まだ歩けない赤ん坊が裸足であるのは、自然だが、赤ん坊の面倒を見ているアイダが裸足なのは、「子どもの貧困」を考えさせられる。ホルンを持っていたり、番犬を飼っていたり、家具や調度品が立派に見えることから、裕福な家庭にも見えるが、アイダは果して学校に通っているのか、読み書きは教えられているのか、疑わしいところである。父親からの手紙を母親と一緒に見ている場面はあるのだが…。

著者のセンダックは、85歳で他界したが、現在は100歳老人が珍しくない高齢化社会に至っている。そのような高齢社会では、小さい字が読みにくくなった老人が、図書館の対面朗読のボランティアから朗読のサービスを受けるなどしている。自力で本が読める高齢者も長時間の読書には耐えられず、短時間で読める絵本を好んで読んでいる場合もある。高齢者もセンダックと同じような「子ども時代への強いノスタルジアを、子どもたちとの熱狂的な連帯感を」感じながら絵本を読んでいる場合がある。絵本や紙芝居は、子どもたちだけのものではなく、大人のためにも有用である。

「山口の朗読屋さん」というボランティア・グループも児童館や子供食堂だけでなく、高齢者施設への出前公演を行ない、老人に紙芝居や絵本の朗読を行なっている。(林2020b、林2019b参照)

また、アーサー・ビナード研究会では、ビナード氏の詩だけでなく、絵本や紙芝居、翻訳絵本のリレー朗読をするなどして、同氏の作品に大人として向き合い、内容を深く味わおうとしている。(林2020a、林2021a参照、別添資料1～3参照)

さらに今後の課題としては、朗読会(林2019b、林2020b、林2021b参照)やビブリオ・バトルなどでも絵本を紹介する活動(林2019a参照)を通して、できるだけ幅広い読者層へと共感の輪をひろげていきたいと考えている。

【参考文献】

浜田佳子(2011)『日・中・韓平和絵本 へいわってどんなこと?』童心社

林 伸一(2021a)「アーサー・ビナードと谷本清平和賞—絵本と紙芝居の果たす役割を考える—」
山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第71巻、pp. 57-74

林 伸一(2021b)「福田百合子先生を囲む朗読会—金子みすゞと「山口の朗読屋さん」—」山口大学
人文学部国語国文学会発行『山口国文』第44号、pp. 14-30

林 伸一(2020a)「アーサー・ビナードについての研究—絵本の朗読と図書館の役割を考える—」
山口大学文学会発行『山口大学文学会志』第70巻、pp. 49-69

林 伸一(2020b)「朗読会の可能性を考える—ボランティア・グループ『山口の朗読屋さん』の視点から—」
山口大学人文学部国語国文学会発行『山口国文』第43号、pp. 132-146

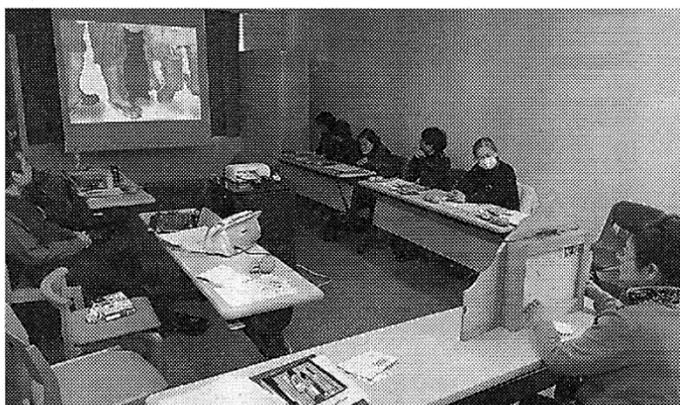
林 伸一(2019a)「ビブリオバトルの現状と問題点—知的書評合戦について—」山口大学人文学部
異文化交流研究施設発行『異文化研究』第13号、pp. 112-120

林 伸一(2019b)「紙芝居と絵本の活用と再評価—『街の朗読屋さん』の視点から—」山口大学文
学会発行『山口大学文学会志』第69巻、pp. 21-35

モーリス・センダック著／脇明子・島多代訳(1990)『センダックの絵本論』岩波書店

(はやし しんいち)

【謝辞】本稿の校正にあたり、山口大学人文学部名誉教授本田義昭氏からの詳細なコメントと修正箇所のご指摘をいただいた。紙幅の都合上、コメント通りの修正ができなかった点もあるが、可能な限り、修正を試みた。この場を借りて、心より感謝したい。



第11回アーサー・ビナード研究会
 次回は12月12日
 【読者通信】 第二回
 アーサー・ビナード研

研究会が二月二八日午後二時から四時まで山口市の阿知須図書館多目的室でおこなわれ一人が参加した【写真】。 二月二日(土)午後二時から四時まで山口市の阿知須図書館多目的室で山口の朗読屋さんとアーサー・ビナード研究会の共催による「冬の朗読会」がおこなわれる。紙芝居『いそおんながでる海』や絵本『ウトウトクイナ』をはじめ『みいちゃん冬の冬』『いったんもめん』『いたずらぎつね』『モチモチの木』『いもころがし』の朗読が予定されている。

賞記念リレー朗読会と銘打ち、『ここが家だ ベンシヤンの第五福竜丸』『ドムがたり』『ちっちゃいこえ』など、ビキニ水爆実験や広島への原爆投下を題材にした絵本や紙芝居をはじめアーサー・ビナード氏の主

定員一五人。参加無料。問い合わせ先電話 〇九〇一六四二五八二〇三



山口市で第6回目
 アーサー・ビナード
 研究会を開き交流

【読者通信】 第六回
 アーサー・ビナード研究会が六月二九日午後二時から、山口市の山口児童館でおこなわれ一五人が参加した【写真】。山口の朗読屋さんの男性は、アーサー・ビナードの詩集から『ハナナ』を朗読し、透析患者の男性は絵本『イツツ・ア・スモールワールド』などとなりどうし(にほんご)し、アーサー・ビナード/え ジョーイ・チヨウを紹介し、「この本は短い文章だけど人種などさまざまな違いをこえてみんながながよく暮らし世界を描いている。黒人差別反対の運動が広がっているけど、人間はみな平等という素朴な感覚を子どもがつかむことができる作品ではないかと思ふ」と語った。

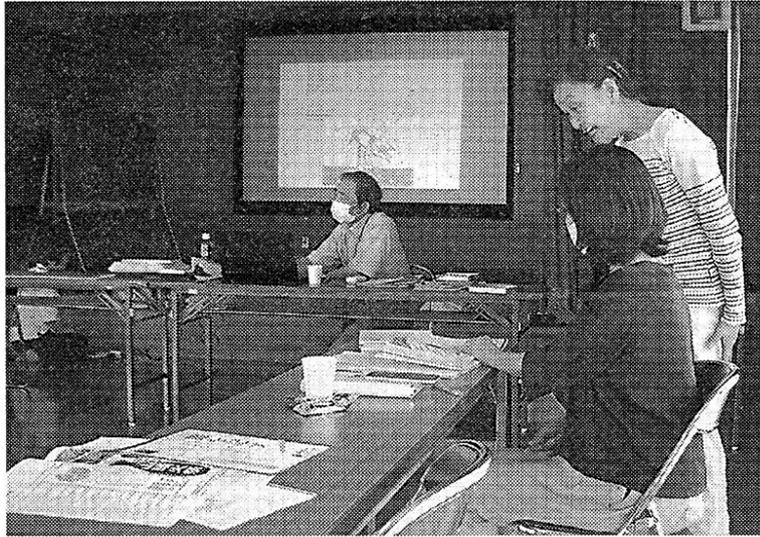
山口の朗読屋さんの婦人は、広島原爆をテーマにした『ドームがたり』『文アーサー・ビナード/絵 スズキコージンをきっかけに広島在住の画家ススキコージに興味があったと語り、彼の絵本を紹介した。元中

学校の男性は、アーサー・ビナードが高く評価している詩人・山之口獺の詩に高田渡が曲をつけた『生活の柄』などをギターで演奏し歌った。七月二日 本人の参加決定 次回、七月二〇日の第七回アーサー・ビナード研究会には、アーサー・ビナード氏が参加する。時間は一三時三〇分～一六時三〇分まで。場所は山口児童館(山口市下堅小路二五四)、定員四〇人(要予約・定員になり次第締め切り)。内容は、アーサー・ビナード氏が次の三作品について語る。 絵本『父さんが帰る日まで』(モーリス・センダック作/アーサー・ビナード訳)。 紙芝居『ちっちゃいこえ』(アーサー・ビナード脚本/丸木俊・丸木位里 絵)。 絵本『そもそもオリンピック』(アーサー・ビナード作/スズキコージ 絵)

第9回アーサー・ビナード研究会
英訳『雨ニモマケズ』で交流
リレー朗読や読み上げ通じ

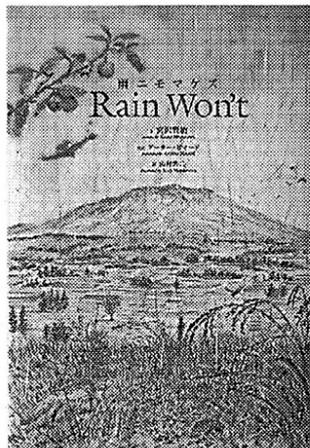
【読者通信】 第九回

アーサー・ビナード研究会が九月二四日の午後二時から四時まで山口市の山口児童館でおこなわれ、九人が参加した。宮沢賢治の『雨ニモマケ



第9回アーサー・ビナード研究会(9月14日、山口市)

ズ』をアーサー・ビナード氏が英訳したものにアニメーション作家の山村浩二が絵を添えた『雨ニモマケズ Rain Won't』のリレー朗読と英訳の読み上げをおこない感想を交流した。



アーサー・ビナード氏が英訳した宮沢賢治の『雨ニモマケズ』の表紙

参加者から「雨ニモマケズ」を「Rain Won't」と訳すと主語が「雨」となることへの疑問が出されたが、英語には「無生物主語」といって無生物が主語になる表現が多いことが紹介されたりしたほか、『雨ニモマケズ』についてアーサー氏がエッセイ集『亜米利加ニモ負ケズ』のなかの『ヘロドトスにも負けぬ』でくわしく触れていることも

紹介されたりし、奥の深い交流になった。次回の第一〇回アーサー・ビナード研究会は一〇月二六日午後二時から四時まで、山口市の山口児童館でおこなわれる。『日本の名詩、英語おどる』を題材に中原中也、与謝野晶子、まどみちおなどの詩をアーサー氏の英訳とともに味わう予定。主催はアーサー・ビナ

ード研究会(代表/金崎清子)。当日はマスク着用。資料・お茶・お菓子・通信費として五〇〇円が必要。
連絡は山口の朗読屋さん(林伸一)電話〇九〇一六四二五八二〇三まで。